

『清水千句』考

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1294 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『清水千句』考

江 本 裕

一 『清水千句』の序文

牛見正和氏よつて「新収俳書『清水千句—解題と翻刻—』」が初めて紹介されたのが平成十四年五月の「ブブリア」(一七号)誌上である。以下の内容は大部分を該稿の書誌・解題・本文翻刻に頼るが、まず牛見氏の学恩に深謝する。

『清水千句』は横本一冊(13・6×19・0)、山口清勝著、山本清知編、「寛文十三歳八月吉日・京二条通／書林山本八兵衛板」。山本清知の序文二丁、巻末に句数(句引)あり。清知の序文は『生玉万句』に關してもきわめて重要な文言を有するので、煩をいとわず全文を引用させていただく(便宜(1)〜(3)に分け、句読点・段落は私に付す。表記を若干変えてゐる。なお本文三十四丁目、第八の名残の折は欠丁である)。

(1) 寛文十三年癸の丑の二月十八日、大坂清水寺観音堂に奉納の万句興行有。おなじく廿五日、生玉の御社にも万句を催されて、やつがれどものしたしみふかき山口清勝を、此道のすき人としてまねかるゝといへども、難波江の住みを

して、釣のいとまもあらぬ身なれば、あまたまびいなびおはするに、猶人のいひやみ給はず。かるき身にかなたこなたの御意はおもし。下地は（二オ）（以下四行破損欠）少き生（以下四分ノ三行破損欠）連衆よなどいひ（破損）□□らひ（破損）て（破損）仏神も請取給はぬ、邪なる心をもて奉納の席につらなる人のおほければ、煩はしくおもはるゝにや。

(2) 清水・生玉の連衆に尋きかれしに、中にもうとからぬ人は、此道の繁昌とよろこびて、ゆめくあらそふころも（二ウ）はりあふ心も有にこそ。本より清勝は清水の清光院より、此度万句のうち八千句めの巻軸、としのうちの立春の発句請取、京・大坂・堺の巧者達に肩をならべて、おろかなる身のかざりともなるべしなどいへれば、猶邪氣なし。しかるをわきよりことがましくいひなすならし。

(3) 生玉は神明、清水は仏陀、彼といひ是といひ、おろそかにおもふ事やはある。清勝清水の（二オ）連衆にして生玉の席につらなることは、まねく友のおほければなり。此たびの清水寺へ出座、懈怠のため、奉納の十百韻は一日千句なりければ、執筆の隙もなく、指合・諸法度の用捨もそこくにして見ぐるしけれど、信心ひとつにて、まことある朋友をすゝむる功德共に成仏の縁にもならんかしの心ざしのふかきを捨がたくて、板にちりばむること、しかなり。

山本清知（二ウ）

上記のうち（一）の冒頭部分は特に重要なので、牛見氏の解題の一部を紹介する。

『清水千句』は、寛文末年から延宝期にかけ、大坂俳壇で活躍した山口清勝主催の大坂清水寺（東成郡天王寺より西安井の北也。『難波鶴』による）奉納俳諧十百韻を収める。本千句は、本書序及び所収各百韻発句（春。「清水連歌」に倣い各発句に「花」を詠み込む）に徴して、先の「清水万句」（寛文十三年二月十八日開催）・「生玉万句」（同年同月二十五日

開催、翌三月七日満尾）興行の後、清勝等十八名一座にて一日で成就した俳諧興行であったと考えられる。

とされ、更に、『清水万句』と『生玉万句』興行の期日が明確になったこと、『清水千句』の興行には大坂俳壇内に無意味な争いの生じることへの配慮があったのではないかと、該千句の持つ意義に及ばれている。御説の通りで、この序文が記すごとく、『生玉万句』の興行が寛文十三年二月二十五日から十二日間の興行であったことは間違いないだろう。また、寛文十三年二月十八興行の『清水万句』は、牛見氏指摘以前の昭和五十三年に前田金五郎氏に指摘がある。即ち前田氏の「土橋宗静日記」（「船場」七）、寛文十三年二月十四日において、「宗久より申来、天王寺清水清光院ニ、先年貞徳発句二道節第三仕置被申候、打捨て有之ニ付、万句興行ノ由、則我等ニも発句せよと被申候故、紙子　宗静　身うごきの音やうら浪鳴紙子（『近世文学雑考』所収稿では「浦嶋子」）。青簾　正俊　青すたれ撥てそみる天下茶屋　如此ニ兩人の名にして二枚遣し候也」を引用して、この記事こそが『生玉万句』序が「かの万句の数にもものぞかれぬ」と記す万句興行であると指摘され、更に牛見氏稿発表後も牛見氏の稿を享け、「前者が宗久主催の万句、後者が鶴永主催のそれと思われる」とされている（『近世文学雑考』所収稿の該稿相当部分「補記」）。

筆者は旧稿『生玉万句』追考」（『國學院雑誌』昭和62・6）で前田氏説を紹介するに止まっているが、現在も前田・牛見氏説を傾聴すべきだと考えている。ただ、二者の興行の間隔がわずか七日しかないことに若干の戸惑いを感じている。前田氏は「対抗作として企画したスピードには驚嘆させられる」（前記二稿のうち「補記」の方）と鶴永の情報キャッチの素早さを強調されるのだが、『生玉万句』出句者が一六〇名（荒木田守武を除く）、興行成就祝賀発句者が四六名（出句者と重複する者八名を除く）、合計二百名を越す人士をわずか七日間ではたして集められたかという疑問である。確かに興行の二月二十五日に全員が集まったとは考えられず、前記の動員数は二月二十五日から十二日間のあいだに（あるいは土橋宗静親子（正俊は宗静の息）のごとく、句を送っただけの者もいる可能性がある）、また祝賀発句の提供者は刊行直前の六月までに送っ

た可能性もある（万句追加の後に「寛文十三癸丑林鐘廿八日」。改めて『生玉万句』を検討する際に考える予定であるが、『生玉万句』出句者と西鶴との関係を考慮すれば、一種のとまどいを抱くことも事実であることを付記しておく。

因みに記すと『清水千句』序が「清水観音堂」（一）の文・清光院（二）の文」と別名で称しているのは、当寺の正式名称は清光院、通称が新清水（寺）、寛永十七年京都清水寺の千手観音を移して本尊としたことに由来する。なお正月十八日ながら、十八日は新清水観音供が営まれる日である（『難波鑑』二）。

あと（一）で問題となるのは、「やつがれどものしたしみふかき山口清勝を、此道のすき人とてまねかるゝといへども」の文言は、「おなじく廿五日、生玉の御社にも万句を催されて」を享けており、即ち『生玉万句』の興行に招待されたということになる。ところが暇なき身にあるので再三断ったがなかなか承知してもらえなかった。以下は破損部分が多いので意味を明確にとりかねるが、「仏神も請取給はぬ、邪なる心をもて奉納の席につらなる人のおほければ煩はしくおもはるゝにや」からは、清勝が断ることが繁かつたのは、該興行の出座者に不純なる動機で出ている者がおり、それを煩わしく思ったとのニュアンスが看取される（不純者は興行主催者である西鶴を指すとも解される）。

続く（二）文言も二つに分けられよう。一は『生玉』・『清水』の連衆でこの道に疎からぬ人に尋ねると、この道の繁栄という観点から考えると『生玉』への出座も喜ばしいことで、決して争う心・張り合う心があつてはならない、という点。二は、清勝は先の『清水万句』興行の折には八千句目の巻軸、年内立春の発句を引き受け、京・大坂・堺の巧者たちと肩を並べて技を競っているのだから、邪気からではない。なのに、脇から口さがなく言う人もいるようである（「おろかなる身のかざりともなるべし」の意味がとりにくい）、「おろかなる身」は『生玉万句』に参加しようとしている一部の連衆を指し、「かざりともなる」は花を添える、箔をつける程度の意となるか）。

（三）の文意も二つに分け得る。一つは両立論。生玉社は神道であり、清水寺は仏教、両方ともおろそかに扱うことはできない、清勝が両方の興行に招かれるのは両方に招く友がいるからである、即ちどちらからもその才を買われているか

らである、という一種の二者包摂論。二は本『清水千句』興行の事情説明。「懈怠」は怠慢、ないしは準備不足の意か。該『清水千句』十百韻の奉納が一日だけの執筆の余裕もないほどの慌ただしさで興行されたこと、従って差合や諸法度の取捨も簡略で拙速の感は免れぬが、俳諧にいそむ同志人たちの精進の気持ちを汲んで版行するものであると。

以上やや長くなつたが、誤読を少なくするように逐条的に解説してみた。そう誤らないだろうと思うが、牛見氏稿にも詳細な解題がそなわること付記しておく。この『清水千句』は巻末に、「寛文十三歳八月吉日／京二条通／書林山本人兵衛板」、つまりは『生玉万句』に遅れること二ヶ月で版行されているのである。版元の山本人兵衛については牛見氏稿も未詳とされるし、筆者にも今の処分からない。

序者の山本清知についても牛見氏稿も知らない人物とされるが、筆者はかすかながら一つの手がかりを得た。井上敏幸氏が「曼殊院蔵『俳諧三ツ物揃』を「連歌俳諧研究」五十三号に紹介されており、今栄蔵氏の『貞門談林俳人大観』の第二部「歳旦集編」にも採録されている。近くには早稲田大学貴重本研究会（雲英末雄・伊藤善隆・二又淳氏）による「翻刻・影印、『本哥取百人一句』（以下、清勝撰『百人一句』と略称）の解題に言及がある。上記清勝撰『百人一句』は別本によつて「延宝三年春月」刊であることが判つており、本『清水千句』とも関わり、西鶴の『哥仙大坂』（以下、『哥仙』と略記）を意識して成つたものであることも指摘されている。

井上氏稿によると該書は巻頭に「俳諧三ツ物揃／延宝三年」とある。「寺町二条上ル町 庄兵衛板」の歳旦集で、そこに「大坂山口氏清勝・衣笠氏友保・隅田氏路春」の三ツ物が載り（ついでながら付すと二組目に「五十歳なりければ」の詞書があつて路春の発句、三組目にも「同」とあつて友保の発句）、他に「元日 世界迷惑の年を越て」の詞書のもと、大坂正勝・キハ女・七才女・清知・立之・常重・辰之・松立・正春等八名の発句と、清勝の歳暮吟が登載されている（傍点筆者、特に断らない限り以下も同じ）。上記のうち傍点を付した「清知」が山本清知に該当するのではないかと憶測する。清知の発句のみを紹介すると、「唐はしらすおさめ給ふや我朝賀 清知」。清知に関しては該書のほか管見の範囲全く手がかりを得ず確言できない

が、清勝の歳旦集に名を連ねることからこの人物が山本清知である可能性はかなり高いと思うのだがどうだろうか。なお、上記のうち、友保・路春・常重については後述する。

二 『清水千句』の連衆

『清水千句』の第一「賦何籠誹諧」初折表三句は以下のごとくである。

ふだらくの身になる縁や花の種 清勝

興じて爰にきたの藤波 成章

盃の底さへ霞しゐあひて 貞因

以下、常朝・路春・常重・本茂・玄三（表八句）、松緑・冷笑・保直等が続き、第十の名残裏三句は、

村のむらがる村鳥なり 常重

花の枝に鼻とまる熊野山 清勝

影もうらゝにかゝぐ燈明 路春

で揚げられている。

以上により、清勝はむろんのこと、藤原貞因・隅田路春が重きをなしていたことが窺われよう。巻末に「句数」(句引)が載りそれを以下に記すが、先述したように該書は第八の名残の折一丁(三十四丁目)を欠くので、その下に筆者が計測した実数を算用数字で記しておく。

| | | | | | | | |
|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|
| 清勝 | 九十壺・91 | 成章 | 四十・40 | 貞因 | 九十五・91 | 常朝 | 五十四・53 |
| 路春 | 八十・79 | 常重 | 六十九・68 | 本茂 | 三十五・33 | 玄三 | 四十六・43 |

| | | | | | | | |
|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|
| 松緑 | 四十式・41 | 冷笑 | 九十・85 | 保直 | 五十四・55 | 友保 | 十三・12 |
| 三友 | 十六・17 | 口慰 | 廿三・22 | 喜遐 | 三十七・36 | 貞富 | 三十七・38 |
| 重吉 | 九十七・94 | 豊春 | 七十一・69 | 執筆 | 十・10 | | |

該句数を総計するとちようど千句となる。第八の一丁分、巻末句数と筆者の計測では二十二句の差が出るはずだが筆者の実数計測の方が多い場合もある（保直・三友・貞富）。そこで筆者が実測した句数を合計すると九九七となる。ところが第八の名残の折一丁を欠くのだから二十二句少なくなるはずで九七八句でなければならぬが、第九の初折裏十句目の作者が「常□（漉ムラ）」で未詳となっていて、筆者は該句作者を数えていない。従つて一応筆者の計測も合っていると考へておく。以上によつて第九名残の丁を欠く現在の実数と「句数」の違いは最大で五句に及ぶが（冷笑）大半が一〜二句なので、以降は「句数」を基準にして考へていく。

上記によつて当日の連衆は執筆を入れて十九名。収録句数の最も多いのが重吉の九十七句。九十句以上が貞因（95）と清勝（91）、冷笑（90）。ついで路春の八十句、豊春の七十一句で上位五名となる。清勝主催の興行であることは序文から疑う余地なく、巻頭・巻軸から貞因と路春も本興行に深く関わっていたと推してもこれまた間違いないだろう。

山口清勝 そこです、『清水千句』を主催した清勝について概略を記す。その中でも延宝三年の清勝主催と推定される上掲歳旦集が貴重な資料となる。上記歳旦集には『清水千句』に重複すると推定される人士が、清勝のほかに、衣笠友保・隅田路春・常重・清知がいる。

このことについては後述するとして蛇足すると、清勝には歳旦集に顔を出す例が他に二つある。一は雲英末雄氏等の「元禄時代俳人大観」⁽²⁾が録する「貞享三ツ物」（貞享三年刊）の、「重栄歳旦帳」である。その三物は「重栄―政頼―清勝」から成り、他に歳旦発句五十句を付す（全二丁）。残念ながら『清水千句』に出座するメンバーはいない。重栄は竹山氏、松江重頼門、撰集に『短綆集』（延宝二年刊）あり。二は、同年刊の「山口清勝三物」で、「大坂山口清勝―きさ女―

「沙門來真」が出るのみ。前出延宝三年の清勝歳旦に出た女性は「キハ女」・「七才女」で、該歳旦集では「きさ女」。『蛙井集』に八句入集の「きわ」は「キハ女」のことか。また前出雲英氏等稿の清勝撰『百人一句』にも清勝と共に「山口氏キハ女」の名で「はなさそうふあらしんきやな木々の鳥」（私に掲載順に順番を付けると96番。以下も同じ）が出る。

次に野間光辰氏紹介の『寛文比誹諧宗匠并人名誉人』と略記がある。該書は全五一七名に及ぶ貴紳から庶民に至るまでの連歌・俳諧の著名人を録した写本であるが、その中に「山口九良兵衛 大坂 俳哥仙人数／井蛙集撰者 清勝」とあり、ある程度は名の通った俳人であったことを知り得る。更に清勝が『生玉万句』に三句出句している事実、なかんずく「第一梅」の第三「鶯を日毎にきけど興は有て」を受け持っていることである。この事実は清勝が『生玉万句』の興行で重要な役割を果たしていることを、如実に示している。

ならば、清勝の寛文末期までの俳歴はどの程度なのか。比較的早い時期の入集としては明暦四年（二六五八）三月刊の『鸚鵡集』（高瀬梅盛撰）への一句入集がある。しかしこれには乾氏に「清勝（大坂） 鸚鵡1（注）山口九良兵衛か、未詳」〔『俳諧師西鶴』所収の「遠近集の研究」の「遠近集」以前〕がある。上記乾氏の疑問は先掲『寛文比誹諧』の「山口九良兵衛」を踏まえての若干の留保と推され、該『鸚鵡集』句引の所付では「摂津」に入っている（今榮蔵氏「貞門談林俳人大観」による。³以後今氏『俳人大鑑』と略）。

次が寛文六年（二六六六）三月刊の『遠近集』（一句入集・西村長愛子撰、摂州大坂／清勝）。『遠近集』は鶴永（西鶴の初号）初見の集として著名で、『鸚鵡集』入集の句が山口九良兵衛清勝なら、西鶴に先行すること八年前となる。『遠近集』なら西鶴と同期。筆者は清勝に関して、『鸚鵡集』初見の立場にたつ。あとは『細少石』（寛文8・6刊・梅盛撰に1句、ただし池田住、寛文十一年（二六七二）正月には清勝初の撰著である『蛙井集』を刊行し、発句五六、付句十二を入れる。⁴）続いて大坂の撰者高滝以仙の『落花集』（寛文11・3刊）に十句入集。同じく大坂の中村宜久・井口如貞共撰の『難波草』（同11・7刊）に一句入集と続き、寛文十二年（三月刊）には伊与宇和島藩主伊達秀宗の四男で城代家老を務めた桑折宗臣

の編む『大海集』に「今津村住／山口氏自足子清勝」で十七句入集。ついでに記せば同集には「山口氏／清勝妹」も一句入集している。

ところで、前掲（注1）稿の解題で雲英氏は、延宝三年刊の清勝歳旦帳に載る「キハ女」を、「妻女きは女」とされている。しかし井上氏紹介の該歳旦帳には「キハ女」「七才女」とあるのみで、「妻」とは書かれていない。雲英氏が急逝されたのでお尋ねする術はなく、また些細なことなのだが、一応ここで整理してみると、延宝三年刊の「山口清勝三物」では「キハ女」「七才女」、同年刊清勝撰『百人一句』では「大坂七歳／きさ女」「山口氏／きは女」、「大海集」卷之二「藤」の項に載る当該句「見て歌や案する藤の浪まくら」には、「山口清勝妹 大坂住」（句引では今津村住）と明記されている。上記から、山口清勝の妹が延宝三年刊の「山口清勝三物」に載る「キハ女」で、同三物の「七歳女」が清勝撰『百人一句』の「七歳・きさ女」であると考えた方がよいのではないか。今の処「山口清勝妹」が「キハ女」であることを証明することはできないが、筆者は「キハ女」は清勝の妹と解しておく。

さて、清勝は、寛文中では『手繰舟』（寛文12・7刊）に7句の入集がある。該集の撰者は阿知子顕成。顕成は連歌から俳諧に移った人で、摂津平野の土橋宗静とも交誼があり、西山宗因とも連歌で一座、京の松江重頼、大坂の松山玖也・梶山保友等とも親しく、堺最初の俳諧撰集『境海草』（万治3・7刊）、『続境海草』（寛文12・7刊）の撰者でもあった。⁽⁵⁾『清水千句』の序者が清勝をして、「京大坂堺の功者達に肩をならべて」と誇示したのは前述の通りである。

以下は略述に従うが『千宜理木』（延宝3・9刊・広岡宗信撰）に十四句、『糸屑集』（同3・11刊・伊勢村重安撰）に十八句、『河内鑑名所記』（同7・7刊・三田浄久著）に三句、『大夫桜』（同8・4刊・和氣遠舟撰）の「藤万句」に一句等、その活動は年を追うにつれて活発となっている。

以上清勝の俳歴を管見の範囲でたどったが、もし『鸚鵡集』入集の清勝が山口清勝であるとすれば俳壇への登場は西鶴より八年ほど早く、『遠近集』だとすると西鶴と同期）寛文十三年刊の『生玉万句』までの両人の足跡では、清勝が勝ると

言えよう。その他の清勝に関しては『生玉万句』を検討する機会に譲り、以下、『清水千句』の連衆について知り得たことを記す。

路春・友保・常重 延宝三年刊の『俳諧三ツ物揃』に載る連衆のうちで『清水千句』の連衆と重複する俳人は、衣笠友保・隅田路春・常重の三名（序者清知が当該人であるとすれば四名）で、その中で著名なのは**隅田路春**である。『誹家大系図』によると路春は安原貞室門で「隅田氏／大坂ノ人 浪花俳歌仙ノ一人ナリ」。後述する貞因・貞富も貞室門である。牛見氏は清勝を初め冷徳門後に立圃につき、さらに宗因に従ったとされるが、右は後注によると、定本西鶴全集十一巻所収の『山海集』の山口清勝頭注（野間光辰氏）「初め令徳門、後立圃に就き宗因に従ふ」によると推される。筆者に何の根拠もないのだが、上述路春・貞因・貞富の参与を勘案すると、清勝が貞室と関係あればまことに好都合なのだがどうだろうか。ご存じの方の教示をお願いする。

乾氏「遠近集の研究」は、路春を大坂の人で江戸屋加兵衛、『崑山土塵集』（4句入集、明暦2・2刊、令徳撰）、『玉海集』（1句、同2・8刊、貞室撰）、『砂金袋』（1句、同3・10刊、山本西武撰）、『鸚鵡集』（1句、同4・3刊、高瀬梅盛撰）、『牛飼』（2句、万治元・9刊、富永燕石撰）、『遠近集』（11句、寛文6・3刊、西村長愛子撰）、『蛙井集』（発句9・付句9、寛文11・正月刊）とされる。また西鶴の『生玉万句』にも一句出句している。なお大坂初の撰集である『ゆめみ草』（明暦2・正月刊、藤山休安撰）にも「大坂之住／隅田加兵衛／正成」が二句入集しており（乾氏指摘の加兵衛と一致。なお「江戸屋」は『崑山土塵集』に「江戸ヤ／路春」、「加兵衛」は『玉海集』の「加兵衛／路春」）、『ゆめみ草』二句入集も認められよう。ついでに付加すると、路春は延宝三年刊の清勝撰『百人一句』にも入集する（48番）。

即ち路春は大坂でとびぬけた存在ではなかったが明暦期（一六五五～五八）以来かなりの活動を見せており、清勝・西鶴等から見ると一日おくべき先輩となる。清勝撰の『蛙井集』の十八句（発句9付句9）は集中第三位を占めており（因みに記すと第一位は清勝の発句56・付句12＝68句、二位は伊勢村意朔の22句）、清勝の配慮が窺われる。路春の『清水千句』への参

与は俳園の近さといい、大坂俳壇での地位といい、清勝にとつて心強かつたに違いなく、最終巻の揚句を務めるにふさわしかったと言ふべきであらう。

衣笠友保は寛文十一年正月刊、清勝自身の撰に成る『蛙井集』に「尼崎／友保」で一句、『難波草』（寛文11年・7月刊）に「撰津国／同（尼崎）住衣笠氏／友保」で二句、『点滴集』（延宝8・9刊）に「大坂／友保」で四句、延宝四年刊『西鶴歳旦』に「下町／友保」が入集している。即ち上記に即せば、『難波草』に入集する友保の「衣笠氏」が延宝三年刊の『俳諧三ツ物揃』の友保の姓と一致し、『蛙井集』の「尼崎／友保」も所付が一致、更に清勝撰『百人一句』41番「尼崎／衣笠氏／友保」から、三集同人と断定してもよいだろう。よつて衣笠友保は一定の俳諧活動を見せていたことが確認されるのである。三人目の常重は現段階では延宝三年の歳旦集と清勝撰『百人一句』42番に「ちぎり木やかたみかはりに麦こなし」で「山田氏／常重」を見出すのみである。居住地は未詳ながら、この常重を『清水千句』の常重と推定しておく。貞因・貞富・松緑・豊春 あとは『生玉万句』にも出句している連衆から概観していく。上記四名とも、『生玉万句』への出句は一句ずつである。そのうち貞因・貞富兄弟についてはここで縷説する必要もないだろう。貞因は禁中御用をつとめた名代の菓子商で明暦二年山城大掾を受領、近世前期の上方狂歌第一人者貞柳の父。『難波雀跡追』（延宝七年刊）に「御堂前 天下一 鯛屋山城大掾」と録され、榎並また藤原を姓とした。『誹家大系図』によれば先述の通り安原貞室門とあるが、塩村耕氏はその前に松永貞徳に指導を受けるとされる。正保四年（一六四七）二月刊、松江重頼撰『毛吹草追加』の「撰州大坂之住／宗継」（宗継は貞因の初号）で三句入集が初見。明暦二年刊『ゆめみ草』に「鯛屋庄九郎／宗継」で十六句入集。（注6の塩村耕氏稿参照）以下、貞室撰の『玉海集』に三十九句の入集をみるなど、撰集への入集は枚挙にいとまがなく、寛文末から延宝にかけては入集句数も比較的によく、大坂俳壇では重要な存在となっていた。『生玉万句』にも一句ながら参与している。また貞因は狂歌もよく嗜み、『古今夷曲集』（寛文6年・5月刊、生白堂行風撰）に四首、『後撰夷曲集』（同12・正月、行風撰）には三十五首の入集をみている。彼は随分と交際がよかつたらしく、片岡旨恕主催の連

歌万句『松門亭万句』（第三九二・六五一）にも出句している。

貞因弟の貞富も相応の活動をしている。兄と同じく貞室門（誹家大系図）、明暦二年八月刊『玉海集』の「貞因弟／貞富」で一句入集が初見か。「榎並貞富」で出ることもあるが（烏帽子箱・1句）『難波草』・1句）、多く「花実庵」を号した。『生玉万句』にも一句入集。延宝四・五年刊かと推定されている撰者未詳の『誹諧昼網』は入集句数から（貞因発句39付句65、貞富発句5付句89）、貞因・貞富いずれかの撰かとされているが（今氏『俳人大観』、塩村氏前掲稿（注6の稿）が水田元清『西吟撰説を提示している。貞富また狂歌を嗜むことに篤かった。『後撰夷曲集』の入集は一〇七首を数え集中第一位、『銀葉夷歌集』（延宝7・2）に7首の入集をみる。

特に貞因は著名な菓子所の当主という肩書もあつて比較的自由な遊俳であつたことが指摘されているが（日本古典文学大辞典）、大坂俳壇におけるそのネームバリューはかなり高く、本『清水千句』においても貴重、巻頭の第三を担うに格好の俳士であつたと称してよいだろう。

次に松緑、姓は小野氏。まず延宝三年刊の清勝撰『百人一句』に入る（82番）。延宝六年九月刊『物種集』巻末の「大坂中俳諸月次日」に「一九日 中（町）松緑 同（夜会）」とあり、この時点では点者となっていたことが分かる。管見の範囲だが、寛文十一年正月刊の清勝撰刊の『蛙井集』への五句入集が初見か。ついで『落花集』（寛文11年3月刊、高滝以仙撰）に二句、『塵塚』（同11刊、池嶋成之撰）に「大坂／松緑軒」で一句入集。以下、『大海集』（寛文12・7刊、宗臣撰）に「大坂住／小野氏／松緑」で三句、『千宜理木』（延宝3・9刊、広岡宗信撰）に三十八句、『糸屑集』（延宝3・11刊、伊勢村重安撰）に二句、『越路草』（同5・6刊、松風軒ト琴撰）に「大坂住小野氏／松緑」で一句、『河内鑑名所記』（同7・7刊、三田浄久著）に四句と共に和歌七首入集、『道頓堀花みち』（同7・11刊、富永辰寿撰）に三句、『太夫桜』（同8・4刊、和氣遠舟撰）に一句、『点滴集』（同8・9刊、岡崎秀綱撰か）に一句入集と、大坂俳壇の中堅に成長している。なお、天和三年六月刊の其角撰『虚栗』に「郭公羅紗の毛衣かへしけん 松緑」が載るのだが、この「松緑」が小野松緑であるかどうかは判

断がつかない。

最後に岩橋豊春。『誹家大系図』によると西山宗因門。「豊流 岩橋氏 名豊春 摂州天王寺邑ノ人 家書 天王寺名所 彼岸桜アリ」とある。『大系図』の記すごとく当初は「豊春」で出句し、後は「豊流」に改めている。清勝撰の『蛙井集』（寛文11・正月刊）での四句入集（豊春）が初見か。以下、『落花集』（18句入集、『難波草』（29句）、『塵塚』（2句）、『大海集』（1句）と、管見の範囲では『千宜理木』（延宝3・9刊・9句）、『物種集』（同6・11刊・1組）、『二葉集』（同7・9刊・2組）など、「豊春」名での入集は延宝八年九月刊の『点滴集』（2句入集、「摂津国・大坂／豊春」までに十五作を数える。対するに豊流号は延宝八年四月刊・遠舟撰『太夫桜』（1句入集）に始まり、『阿蘭陀丸二番船』（延宝8・8刊、3句入集）から元禄十五年刊の『花見車』（轍士著、巻二「京・大坂・江戸并諸国宗匠」）まで二十一作である（ただし元禄期まで^⑦）。延宝八年九月刊の『点滴集』では豊春と号しながら、一方で同八年四月刊の『太夫桜』・同年八月刊の『阿蘭陀丸二番船』で既に豊流と号しているなどの矛盾もあるが、『西鶴大矢数』（延宝八年五月興行、刊行は翌九年四月、冒頭の役人）では豊流となつているので、延宝八年中の改号と考えてよいだろう。

以上些事にこだわったが、彼は延宝八年五月興行の『西鶴大矢数』では脇座役をつとめ、大坂から三十六人を選ぶ『山海集』（延宝9・3刊）、同じく大坂から百人（実数九十八人）を選ぶ『俳諧百人一句難波色紙』（天和2・正月刊）にも入っており、前出『花見車』の「大坂宗匠」二十七名の内にも入っている。本『清水千句』での出句数は七十一、総体から見て多からず少なからず、鄭重に遇されていると考えてよいだろう。最後に豊春参加の理由を考えるに、彼は「天王寺邑ノ人」（『大系図』）であった。後年の記事ではあるが、「西山屋の内でもおばさまくといふて、いとしがられる太夫也。いまは老の姿に引かへ、あふさかの清水に影をうつし」と『花見車』（巻二）評されたごとく、居を近くに構えていたことが縁となつたのではないかと、推測している。（注7に列挙する俳書の所付も参照されたい）。

重吉・冷笑 残るは重吉等8名であるが、まず出句数の多い重吉・冷笑を簡単に概観する。先掲したように重吉は九十七

句と最も多く、冷笑も九十句。九十句以上は清勝九十一句、貞因九十五句があるだけである。しかして重吉を名乗る俳人はすこぶる多く、特定しがたい。いま、江戸・秋田等圏外と推される者を除いて列举すると、①京（山城）渡辺重吉（崑山集・9句、玉海集・2句）、②堺住 渡辺重兵衛重吉（崑山集・3句）、③京 畑田氏重吉（玉海集追加・1句）、④兵庫 北沢氏重吉（玉海集追加・2句、大和順礼・1句、蛙井集・4句、ただし北沢氏は玉海集追加のみが出ず）、⑤但馬 小谷氏重吉・続山井・1句、⑥江州多賀 中村重好（宝蔵・1句）、⑦大坂（天満・大坂・十三）天満之住 伏見屋源左衛門重吉（夢見草・17句）、摂津大坂 重吉（落花集・11句）、十三 清勝撰『百人一句』（84・重吉）、⑧『独吟一日千句』佐々木重吉（44）。

あくまでも管見の範囲だが以上のうちから、④の兵庫・重吉と⑦の大坂重吉に可能性があるだろうと考えた。摂州兵庫重吉は『玉海集追加』が北沢氏とするだけだが、多の二集も同姓である可能性を持つ。しかも『玉海集追加』の撰者は貞室であり、『蛙井集』は清勝撰である。可能性として残るのは大坂重好（落花集）、天満伏見屋重吉（夢見草）、十三重吉（清勝撰百人一句）であろうが、『夢見草』は具体的ながらいささか時期が早すぎる。今は、『落花集』と『百人一句』の重吉が同一人であると推測して、兵庫重吉について有力であるとしておく。

次の冷笑であるが彼については殆ど手がかりを得てない。わずかに西鶴編・延宝三年四月序の『独吟一日千句』追悼句の五十一番目に「竹嶋冷笑」で「もらひ鳴やとふらひ鴉時鳥」の句を送っており、延宝三年九月刊、広岡宗信撰の『千宜理木』に「大坂／冷笑」で五句入集しているのみである。『千宜理木』の冷笑が竹嶋氏であるかどうかも確認できない。今氏著『貞門談林俳人大観』、また雲英等稿「元禄時代俳人大観」を検索するに、冷笑なる俳名は稀で、わずかに大淀三千風著の『倭漢田鳥集』（元禄14年刊、岡本勝氏の『大淀三千風研究』に翻刻）に「熊本／冷笑」（ただし和歌）を見るのみ。『千宜理木』の冷笑が竹嶋氏であるかどうかは確定できないが一応二書をあげ、多少の俳諧活動があったと見当を付けておく。

本茂・玄三・喜返・保直 次は三十から五十句程度出句しているグループ。この連衆はある程度の俳諧活動を見せており、

特に保直は注目すべき存在と考えられる。まず本茂で気づいた入集俳書をあげると、『蛙井集』に八句（発句3・付句5）、『落花集』に「大坂／本茂」で三句、『千宜理木』に「大坂／本茂」で二句（発句1・付句1）、『糸屑集』に「撰津大坂／本茂」で二句、『難波草』の「河内／布忍／本茂」は別人であろう。上記から寛文末から延宝初期にかけての入集が目立ち、『蛙井集』の六句入集は、清勝との近さを類推させる。

玄三はいささか複雑である。乾氏『遠近集』の研究⁸は大坂の人とし、『ゆめみ草』三句、『遠近集』一句、『新続犬筑波集』一句、『埋草』二句入集を指摘される。上述玄三は万治三年正月刊の『新続犬筑波』に「大坂今橋真嶋氏／玄三」と記載されており、上記四作はこの人と考えてよいだろう（他は所付を「大坂」とするのみ）。ところが『蛙井集』に「河内／玄三」が二句入集しており、『物種集』には藤井玄三が一組採録されている。「河内玄三」は『蛙井集』だけであるが、『藤井玄三』は『短綆集』（延宝2・3刊、竹山重栄撰）に「藤井法橋／玄三」で一句、『続連珠』（延宝4・11刊、北村季吟撰）に「藤井氏／玄三」で一句、『近来俳諧風鉢抄』（同7・11刊、岡西惟中撰）と『稲筵』（貞享元・正月刊）でも同様に出る（前者では「法橋玄三」で3句入集、後者では「京藤井玄三」で2句入集）。特に京の玄三は季吟系の連句に名を連ねることが多く、大坂の玄三は場所的には問題ないが時期的にやや早すぎ、河内の玄三は『蛙井集』のみであることにひっかかり、京の玄三は時期的には合致し、俳歴も申し分ないが、法橋の位を持つ玄三が京から参加したかに問題が残る。今は京都の藤井玄三が有力であると指摘するに止めておく。

対するに喜遐は問題なくいきそうである。寛文十二年七月刊の桑折宗臣撰『大海集』の、「大坂住／木原氏／喜遐」での三句入集が初見か。ついで広岡宗信撰の『千宜理木』（延宝3年・9月刊）「大坂／喜遐」の十九句、ついでに記すと該集には「大坂／喜遐妻」一句が入集しており、夫妻で俳諧を嗜んでいたことを知る。伊勢村重安撰の『糸屑集』（同3・11刊）にも喜遐六句、喜遐妻一句が入集。西村西治撰の『二葉集』（同7・11刊）には「木原／喜遐」で四組、富永辰寿撰の『道頓堀花みち』（同7・11刊）喜遐で五句、『近来俳諧風鉢抄』（同7・11刊）に一句入集している。以上により『清水千句』

に出句する「喜遐」は上記の木原氏喜遐であると断じて間違いなく、大坂俳壇の中堅として、以降の談林派とも別儀なく交わっていることを知るのである。

残る保直。乾氏「遠近集の研究」は該集を初見とする（大坂・保直・1句）。以下管見確認の俳書数は歳旦集まで含めると三十作に及ぶ。『大海集』に「撰津国／大坂住／松井氏友松子／保直」（8句入集）とある。以下、『落花集』（3句入集）・『誹諧法農華』（2句）・『手繰船』（1句）・『千宜理木』（1句）『阿蘭陀丸二番船』（14句）・『太夫桜』（和氣遠舟撰、1句）を経ながら、『誹諧すがた哉』（元禄5・正月刊、遠舟撰、4句入集）、『しらぬ翁』（同6・5刊、遠舟撰、2句）、『熊野がらす』（同7・6序、南水・安之撰、4句）、『難波順礼』（同7年成、瓠界撰、2句）など、主に遠舟撰の俳書に参与する。

しかし元禄後期になると、元禄八年六月刊『芭蕉翁追悼こがらし』（壺中・芦角編、天理・綿屋俳書集成22に影印）の「芭蕉翁追悼ノ句」に「保直」で一句が入集している。該書は巻頭で芭蕉晩年の行状を記し、去来・文章・惟然・信徳・風国・之道・舎羅等の追悼句を載せるもの。「なき人の倂さむしのぼり舟」が保直の追悼句である。ついで同年刊の、芭蕉伝記資料としても貴重であると評されている『芭蕉翁行状記』（路通撰）に「一時雨あふとわかるゝ明座敷 大坂／保直」で一句入集（日本名著全集・芭蕉全集）。「韻塞」（元禄・9・12成、李由・許六編）は芭蕉三回忌に際し蕉門諸家の句五三四を集めているが（乾の巻）、該書にも「大サカ／保直」で一句入集している。以下は注に譲る。⁹⁾

歳旦集をあげると、元禄十一年の『歳旦牒』（雲英氏等「元禄時代俳人大観」十六による。圧倒的に蕉門句が多い）の諷竹独吟三物のあとの歳旦発句と歳暮吟に「保直」句が入り、『元禄十三年歳旦集』（天理・綿屋俳書集成17に影印）に収まる「元禄十三庚辰年／十方窟天垂」の「三物」の第三をつとめ（鶯の出むかふ雪の朝けしき 保直）、同十七年刊『誹諧三物揃』の「浪花風薫舎芙蓉」歳旦集では、芙蓉独吟三物と歳暮吟に続いて、諷竹・保直の元旦発句が載る。

しかのみならず、元禄後期には連句においても活動を見せている。即ち元禄十一年十一月序の、大坂蕉門の中心をなす諷竹（前号之道）撰の発句・連句集『砂川』（二巻）が刊行されるが、巻下では、芭蕉の「塩鯛の歯ぐきもさむし魚の店」

を発句とする四吟歌仙で、(芭蕉の発句のほかは志用・飄竹・保直)で、保直は十一句を詠んでいる。該書は櫻井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』に翻刻があり(天理・綿屋俳書集成32に影印)、櫻井氏巻末の句引によると、発句入集は十六句、三十句の飄竹について第二位となる(志用も16句)。

『遠近集』に始まり、大坂談林派で相応の存在として活動した保直と、元禄後期からの蕉門直系でないが蕉風系にきわめて近い保直はあるいは別人ではないかと一応は疑ったが、大坂在であることは間違いない、他に別人としての論稿あるを管見の範囲では知らない。総括すると、松井友松子直保は、やや時期的にはおくれるものの、俳諧史の思潮変遷に順応していった、数少ない俳人であつたと評すべきであろうと考える。近時読む機会を得た尾崎千佳氏の「宗因顕彰とその時代」(『連歌俳諧研究』97号、平成11・8)では、宗因没後の談林派の俳人が、蕉門俳諧に与し、あるいは彼等と交わることによって自らの地場を確保していった旨を述べられているが、保直の場合は如上の典型的俳人と言えそうである。それによつても処々で引例した元禄後期以後の彼の発句は、明らかに質を異にすると感ずるのであるが筆者の僻目であろうか。

三友・常朝・口慰・成章 最後は十六句出句の三友と五十四句の常朝、二十三句の口慰、四十句出句の成章である。三友は、『生玉万句』に四句出句している多古三友がいる。他の撰集はといえば寛文八年五月奥書の加友撰『伊勢踊』に「撰津／大坂住／三友」で三句、『続大和順礼』(寛文12・6刊、岡村正辰撰)に「撰津／三友」で二句、『下主知恵』(延宝4以前刊)に「大坂住／三友」で一句出句を認め得る。『武蔵野集』(延宝4・3刊、維舟撰)「伊丹／山田／三友・1句」もある。『蛙井集』の「三友」二句出句も上記のいずれかに充ててよいだろう。大坂近辺以外では、武蔵国『一本草』、「新町下立売下ル」(『俳京羽二重』二二)、御油・三友(『小弓俳諧集』)などを見る。

上記のうち大坂三友(『伊勢踊』『下主知恵』)と撰津三友(『大和巡礼』)伊丹三友(『武蔵野集』)、それに『蛙井集』の三友以外は除いてよく、右の「三友」が『生玉万句』の「多古三友」とどう連関するかである。『生玉万句』の四句出句は多一方で、該書に四句以上出句する者は西鶴を含めて十八名を数えるだけである。しかして「多古／三友」の「多古」は人

名でなく地名を示す可能性の方が高い⁽¹⁰⁾『蛙井集』は清勝の撰だから最も近いと考えられるが該書には所付も姓も付してない。今は、「多古三友」「摂津三友」とも、摂津尼崎藩「タコ村」の三友を指すと推定しておく。

次の常朝については殆ど手がかりがなく、わずかに清勝撰『百人一句』（延宝3年刊）の35番に「友田氏／常朝」と、天和三年刊の『誹諧三物揃』の立以三物に名前を見るのみである。ただし該『三物揃』の立以の処では、立以―常朝―清十に続いて、大坂山口清勝―清房―来真の三物を載せており（今氏の『俳人大観』による）、これによると常朝と清勝が繋がることになる。『誹家大系図』によると、立以は「野々口立圃門」で出るが、「喜多村氏、通称休斎名宗清、大阪備後町二住ス。初は令徳・貞室二従ヒ、後立叟ノ門弟トナル」（立叟は立圃の別号）とある。さすれば清勝の俳歴と重なる処があり、ここに出る常朝は、『清水千句』に出座する常朝と考えてよいのではないか。残念ながら撰集には見出しがたい。

残るは口慰と成章だけとなった。両人の手がかりは現在の処得ていない。口慰については古典俳文学大系のCD-ROMが、延宝七年十二月、才丸撰の『坂東太郎』に三句掲出するが、句引には「江戸」となっており、まず本『清水万句』作者の可能性はない。更に『松嶋眺望集』の「燈嶋^{ひつじま}」の項で「口慰」一句が掲出されるが所付が「フクシマ」（地名）となっていて、この可能性もない。あとは今榮藏氏『俳人大観』に刊年未詳（『柳亭筆記』を引用して寛文末かと推定）の『知恵袋』に「飯田／口慰」を見出す。この「飯田」は全体の構成から姓と判ぜられ、可能性がないことはない。ただこれだけで当該人と決めることはできず、今は未詳としておく。また成章についても全く手がかりを得ていない。成章は掲示したように巻頭第一の脇をつとめている。慣例に従えば席主となるが新清水寺清光院の關係者か。前出CD-ROMは天明七年（一七八七）二月序の『骨書』^{はねがき}と安永五年（一七七六）刊の『左比志遠里』から「成章」を掲げるが問題にならないだろう。

三 『清水千句』について

以上『清水千句』序文の含む問題点と該書の連衆についていささか冗漫に記してきたが、連句の特徴その他の内容に触れる処が殆どなかった。その理由は該書の序文を含む成立経緯や連衆の構成が、西鶴の処女編著たる『生玉万句』の序文並びに人的構成と密接に連関すると、紹介者の牛見氏説も説かれ、筆者も同様に考えているからである。

結論めいたことは今後予定している『生玉万句』を考えた末に出されると思うが、今、『清水千句』の概要を検討したことのみにつけて若干試みると、ここでまず延宝三年春月刊、山口清勝撰の『本音取百人一句』入集者から『清水千句』にも入集する連衆だけを列挙すると（可能性あるものをも含む）、

35 友氏田常朝 36 藤原貞因 41 尼崎衣笠氏友保 42 山田氏常重 48 隅田氏路春 67 木原氏喜遐
73 藤原氏貞富 81 岩橋氏豊春 82 小野氏松緑 84 十三住重吉 97 山口氏清勝

以上十一名。ほぼ一割強である。決して多くはないが、少なすぎる数でもないだろう。次に延宝三年刊の『俳諧三ツ物揃』と天和三年刊の『俳諧三物揃』所収の清勝・立以関係への出句者は、隅田路春・衣笠友保・常重・清知（序者、以上前者）、常朝（後者）である。そして上記は、清勝色が強く投影されていると考えてよいだろう。

因みに『清水千句』出句者で『生玉万句』にも出句する俳人は清勝・路春・貞因・貞富・松緑・豊春・三友・重吉（後二者は若干の疑問あり）の八名。これを、清勝撰『百人一句』と『生玉万句』双方に顔を出す者に拡大すると、数だけで示せば二十ないしは二十一名となる。もって両書が深く関わることが了解されるのだが、この件に関しては『生玉万句』を検討する際に譲る。

残るは山口清勝が寛文十三年八月の段階で『清水千句』を刊行した理由ないしは意義だけであるが、その前に、『清水

千句』『生玉万句』双方に出句した連衆のその後の遇され方を、西鶴サイドからごく簡単に見ておく。

まず清勝。彼は『生玉万句』(巻頭第三等3句) 刊行と同年の延宝元年(該年は九月に延宝と改元) 十月序の『哥仙大坂
俳諧師』に、津田休甫・西山宗因・天王寺道寸などと伍して入集、しかもその初撰と見られる『俳諧歌仙画図』には入っていないかつた可能性を持つ。以降もすべて西鶴編著(斎藤賀子等、外面上他編者となつてゐる作品も含む)になるが、『古今俳諧師手鑑』『山海集』『百人一句難波色紙』(以下、『難波色紙』と略記)に入集、延宝八年五月興行の『西鶴大矢数』では脇座役をつとめている。『独吟一日千句』『西鶴歳旦』など、西鶴の私的な側面を持つ俳書に参加していない処に若干の疑念を持つが、感情的な対立や俳諧師としての確執があつたとは受け取れない。路春・貞因・貞富もしかり。上記の中で貞富のみが『独吟一日千句』(追悼句26番)のみの採録でいささか気になるが、兄貞因が、『哥仙』『独吟一日千句』(追悼句10番)『西鶴歳旦』(引付11番)『古今俳諧師手鑑』『山海集』『難波色紙』、それに『大矢数』の後座役をつとめたことを考えれば、決して不当に遇された結果とは考えられないだろう。

検討すべきで残るは豊春と松緑。豊春は宗因門(『大系図』)とされているが、彼は西鶴とも親しかつたらしく、『西鶴名残の友』(元禄12年4月刊)巻四ノ二に、「難波江の芦かる比、ほとゝぎすの千句して、益翁・由平・来山・如見・豊流・賀子・万海などうちよりて、一日に満座して」と、楽しそうに語られている。しかも豊春は西鶴編の延宝四年『大坂歳旦』引付二十七番目に入り、『山海集』、『難波色紙』に入集、『西鶴大矢数』では脇座をつとめている。松緑また然り(俳系は分明ならず)、『独吟一日千句』追悼一五〇中の三五番目、『西鶴歳旦』引付二十六番目に入り、『山海集』、『難波色紙』に入集、『西鶴大矢数』にも参与している。兩人とも西鶴との交誼も厚かつたと見られ、微塵も『清水千句』への出座は影響していないのである。

如上の事実から『清水万句』『生玉万句』二つの興行に想定されることは、清勝側はできる限り自身に近しい連衆を動員して、もし序文を信ずれば、少々の拙速をいとわずに一日で興行を強行したようにかがわれる。西鶴側もさして気に

はしなかつたものと思われる。そして右の想定は先掲序の「清水は仏陀、生玉は神明、彼といひ是といひ、おろそかにもふ事やはある」にも通ずるし、「神仏に対する信仰心をもって西鶴との融和を図ろうとしたのではなからうか」、「清水千句」興行及びその出版は、大坂俳壇内に無意味な争いが生じることへの配慮であつたのではなからうか」とする牛見氏の解題とも相通じる面をもつ。

しかし右の牛見氏氏の推定に対し異論を唱える稿もある。雲英末雄氏の見解である。

ただ、この推定（前引牛見氏の推定）には必ずしも従えない要素がある。それはむしろ、「清水万句」と「生玉万句」双方に出座した旧派の清勝が、自分の立場や自派の結束を強めるために「清水千句」を興行し出版したのではなかつたか。「西鶴との融和」ということであれば、この「清水千句」に出座を要請してもよかつたとおもわれるが、それもなく、さらに本書『本哥取
絵入百人一句』に西鶴の句を入集させてもよいと思われるが、それもなし。

さらにこのあと、自らの立場を鮮明にした清勝が、大坂の旧派俳人たちを多く収録して本書（清水千句）を刊行したのではなからうか、との推定もされている（『翻刻・影印』本哥取
絵入百人一句解題）。この問題に関してはなお後考を期すとされながら、平成二十年十月に急逝された。まことに残念である。

右雲英氏の見解は、筆者、そしておそらくは牛見氏の見解とも対立する。少なくとも筆者がここまでに冗長とも言えるほど細かく述べてきた清勝の同系俳人の重視は、大坂俳壇に波風を立てなくする配慮と解してきたが、視点を変えたとそのまま雲英氏の「自派の結束」ということになる。また清勝自身の『百人一句』になぜ西鶴を入れていないのかという疑問は、該書に大坂から七十七名（雲英氏解題による）も採録しながら、かつ自身は西鶴の『哥仙大坂
俳諧師』に入集している事実に徴すれば、確かに疑問である。この点に関してはなお検討の必要があると思うが、ここまで述べてきた『清水千句』出座者に対する西鶴の応対、清勝の行動（たとえば『大矢数』興行で脇座役をつとめていることなど）を考えると、以降、両者に確執があつたとは思われない。雲英氏の「自分の立場」を顕示するためとする見解はやや深読みすぎるのではないか。

「自派の結束」を強めようとする意図はむろんあつたであらう。みずから重要な位置をしめた『生玉万句』興行の成功をまのあたりに見、かつ直後に刊行された『哥仙俳諧師』に入集し、しかもそこに多くの大坂新進俳人が入集していることに刺激されて、既に撰集の刊行では一歩先んじている清勝が、更なる実績作りが必要なことを痛感して、急遽、『清水千句』刊行を決断した。山本清知の序文には、当時の大坂俳壇趨勢のなかでの清勝の立場が微妙に反映されているのではないか、そう思うのである。むろんその際にも、路春や貞因の存在意義、また豊春・松緑参加の持つ意味が考慮されなければならぬだろう。結果的には『清水千句』刊行の成果が清勝撰『百人一句』刊行に結実したことは間違いなく、今後我々は、清勝の『百人一句』の内実がどのようになっていくか、清勝派なるものが大坂俳壇でどのように生育していつているかを検証する必要もあらう。今後は清勝の活動に注目していきたい。

最後に一つ加えておくと、前田金五郎氏が「土橋宗静日記」において、八木宗久主催の万句興行で西鶴が除外されたこと難しながらも（『生玉万句』序）、続いて編集刊行した『哥仙』に宗久を入れたことに対する論評で、師宗因の取りなしで和解したか、あるいは正面きつて喧嘩しても、適当な所で仲直りするという、いわば、客商売としての内輪もめ、狭い世界を遊泳する要領のよさを指摘されている。前田氏は延宝期に罵詈雑言をきわめた貞門・談林間の論戦も引例されるのだが、確かに西鶴と惟中のその後の関係、また突飛ではあるが昨今の政治情勢を傍観するに、そのような面をも内包しているのが限られた世界での実情ではないかと推測する。

ともかく、清勝とは直接的に関係はないと考えられる本茂・玄三・冷笑・喜遇・保直等一定の俳歴を持つ中堅俳人の参与は『清水千句』興行に彩りを加えたことを確認しておきたい。

注

- (1) 雲英末雄氏等による「翻刻・影印『本哥取・絵入 百韻一句』」解題に、平成六年度東京古典会主催の入札会（目録三四九番）

に出品された『歌仙俳百人撰』の巻末に、「延宝三乙卯歳春月吉祥日」の刊記があった旨を記されている。

- (2) 雲英氏等が作成する「元禄時代俳人大観」は、今栄蔵氏著の『貞門談林俳人大観』を享けて、貞享元年から始まる稿である。該稿は「近世文芸 研究と評論」の第四十四号(平成6年・6月)から始まり現在も続行中である(最新は78号・平成22・6、その35回目、宝永4年までに到っている)。発足時のメンバーは雲英氏のほか、池澤一郎・伊藤善隆・大村明子・佐藤勝明氏であったが、メンバーにはかなりの異同がある。本書では元禄十六年六月刊の『青すだれ』(該誌67号・平成16・11、その24)までを対象として参照させていただき、多大な教示を得た。また、櫻井武次郎氏著の『元禄の大坂俳壇』に所収される「元禄大坂誹諧書誌」にも多くの教示を得ていることを銘記する。

- (3) 今栄蔵氏著『貞門談林俳人大観』による。同氏の『鸚鵡集』の句数は、天理図書館綿屋文庫蔵の影写本句引によるとされる。
- (4) 『蛙井集』は発句・付句集であるが、本書では原則として両者を合わせた数で示し、必要に応じて分けて記した。

- (5) 『境海草』については、那賀盛之が撰を進めている途中で死去したため、阿知子顕成が後を継いだ旨が記されている(序文)。

なお、堺・平野・大坂の親密な俳壇関係については、前田金五郎氏の「地方俳壇としての堺」、『土橋宗静日記』、永野仁氏『堺と泉州の俳諧』(新泉社・平成8)に詳論がある。

- (6) 塩村耕氏「鯛屋一族の文芸活動の諸問題」参照(「近世文芸」44・昭和61・6)

- (7) 本文で列挙した俳書以外で管見の確認した「豊春」で見られる入集作は以下の通りである。『生玉万句』(寛文13年6月刊か、1句)、『桜川』(延宝2・5跋、内藤風虎撰、1句)、『千宜理木』(同3・9刊、宗信撰、9句)、『糸屑集』(同3・11刊、重安撰、2句)、『誹諧昼網』(延宝4・5刊、水田元清(西吟)か、16句)、『西鶴歳旦』(延宝4、引付27)、『道頓堀花みち』(同7・11刊、富永辰寿撰、2句)。

一方、豊流号で入る撰集は以下の通り。『山海集』15左(延宝9・3、斎藤賀子撰)、『俳諧百人一句難波色紙』30(天和2・正月、土橋春林撰)、『誹犬の尾』(同2・正月、松花軒蛇鱗撰、歳旦発句集)、『誹秋津嶋』(元禄3・10、団水編、3吟3句、天王寺・豊流)、『連夷』(同4・8、賀子撰、2句、大坂・豊流)、『誹よるひる』(同4・11、文十撰、1句、天王寺・豊流)、『河内羽二重』(同4・11、幸賢撰、1句)、『難波曲』(同4・正月、高木自問撰、1句)、『ささらぎ発句』(写本・元禄5・2序、季範撰、1句)、『誹浪花置火燵』(同6・2、休計撰、1句、大坂・豊流)、『誹しらぬ翁』(元禄6・5、遠舟撰、1句、天王寺・豊流)、『熊野がらす』(同7・6、南水・安之撰、1句、天王寺・豊流)、『網代笠』(同11・5、露泉撰、1句、大坂・豊流)、『あさくのみ』(同

12・関9、舎羅撰、1句、天王寺・豊流）、『金毘羅会』（同13・9序、寸木撰、1句、天王寺・豊流）、『続古今俳諧手鑑』（同13・10序、笑種撰、大坂・岩橋・豊流）、『俳ふたつもの』（同14・正月、蘭道撰、3句、天王寺・豊流）、『荒小田』（同14・4、舎羅撰、1句、天王寺・豊流）。

後年になるほど一句入集が多い。豊流は生没年未詳、元禄九年以降に没とされており（俳文学大辞典・永野仁氏執筆）、没後入集の可能性ある書もあるだろう。

(8) 以下、京の藤井玄三と推定される玄三の、季吟系連句集への参加を今氏の『俳人大観』連句集編よつて記す。『季吟宗匠俳諧』（写本）は寛文十年四月以前成立の百韻十三巻を収めるが、その第十二番目の十吟百韻に「季吟16・高茂9・玄三12・湖春15」（以下略）があり（寛文十年二月廿九日東山にて高茂興行）、次が寛文十二年刊の『季吟十会集』は百韻十巻を所収。その第六番に十二吟百韻があり、「季吟16・重義5・湖春15・玄三10」（以下略）、（寛文十年霜月九日埋忠重義興行）。更に該集九番の十吟百韻にも「季吟13・湖春12・宗英10・玄三10」（以下略）、（寛文十二年五月朔日酒家宗英興行）が収まる。以下は略述になるが、延宝四年三月刊の『季吟廿会集』。該集には季吟・西山宗因・阿知子顯成を含む九吟百韻（二番）も入集するが、十一番に季吟・湖春・玄三を含む十吟百韻（寛文12・4・17）と、十九番に前記三名を含む九吟百韻が収まる。寛文以前の諸家連句を収録する『俳諧集書留』（写本）にも季吟・湖春・玄三を含む十吟・十二吟・十一吟百韻が存在し、連句集ではないが天和三年の歳旦集である『俳諧三物揃』にも正立しょうりゅう（季吟の次男）三物のあとの元日発句に玄三が名を連ねている。これで京の玄三が季吟ときわめて近い関係にあったことが知られよう。ただし以上は今氏著からの引用である。また、小異はあるものの玄三出座の興行にはメンバーが重複するケースが多い。以上のことから玄三はかなりの俳歴を積む「法橋」であったと推定されるが、その玄三を『清水千句』の参加者として、しかも京から比定することに問題が残るかもしれない。

(9) 筆者が蕉風らしき雰囲気を感じ得るのは、元禄六年冬序、藤井巴水撰・路通跋の『俳諧獅子集』（塵塚の夜のひかりや古扇大坂／保直）（加能越古俳書大観・上・石川県図書館協会・昭和46復刻）からである。該集は貞室・宗因等の発句を入集しながらも、大津乙州・江戸其角・京去来・大坂之道・江戸曾良・桑門芭蕉・凡兆・江戸嵐雪等多くの芭蕉及びその門弟が入集している。大河良一氏著『加能俳諧史』（清文堂出版、昭和49）によれば巴水は藤井氏、それ以外の伝は未詳とされ、該集は蕉門の句を集めて住吉神社に奉納された著とされる。元禄六年の秋には轍士が金沢を訪れており（大河氏著）、事実『花見車』巻四に、「俳書の出版へ」京より外にあるはしりがたし。句のさがしにくきは是非なく、せめての事に題号をあらはしける」として、「巴水 菰師子」

をあげる。所収書新日本古典文学大系71の注に「芭蕉をはじめ蕉門の主要なメンバーが入集する」、同上書巻末の「人名索引」でも「巴水 加賀金沢の人、藤井氏。編著鷹獅子集」と記すだけである。冗漫にすぎたが、該集での「大坂／保直」の二句入集も、やはり異色と言えよう。

以下、本文に記さなかった保直の入集俳書を、蕉風系にとらわれず、順次しるす。『諧生駒堂』(元禄3・11跋、燈外撰、保直・1句)、『きさらぎ発句』(元禄5・2序、季範撰、保直・1句)、『橘守』(元禄10・閏2刊、荷兮撰、大坂・保直・3句)、『鳥のみち』(玄梅撰、元禄10・3序、保直・1句)、『はしらこよみ』(元禄10・6刊、鶴声撰、大坂・保直・1句)、『喪の名残』(元禄10・11刊、北枝撰、保直・1句)、『淡路嶋』(元禄11・3刊、諷竹撰、保直・13句・保直出座の九吟歌仙あり)、『養笠』(元禄12・4刊、舎羅撰、保直・3句)、『梅乃嵯峨』(元禄12・5刊、三惟撰、保直・4句)、『誹諧男風流』(元禄12刊、天垂撰、保直・4句)、『駒概』(元禄15・6刊、芙蓉撰、保直・5句)、『夢の名残』(宝永2・4序、海棠撰、保直・5句)。

(10) 『生玉万句』に出る「多古三友」の「多古」は、姓ではなく地名である可能性が高い。歴史地名大系の『兵庫県の地名』の「高羽村」(現神戸市灘区楠丘町・高羽町等)は近世期摂津尼崎藩に属し、「慶長国絵図」等は「タコ村」と称した旨の説明があり、川村博忠氏の『江戸幕府撰 慶長国絵図集成』(柏書房・平成12年刊)によると、摂津菟原郡に「タコ村 式百九十石四斗五升九合」とある。当地は神戸の東方に位置し、御影(東灘区)の西、西宮・尼崎に近い。下垣内和人氏著『近世中国俳壇史』(和泉書院・平成4年刊)の第二章で、「延宝期を中心とした俳書の中から、中国地方の人々の作品を挙げてみよう」とされた上で、『生玉万句』から、「多古／正倫」をあげる。「多古・三友」はないが、この「多古」を中国地方と解されているようで、なお検討を続行する。なお、摂津菟原郡「タコ」村の漢字表記を含めて、歴史的地位や文化状況も未調査である。